

ホメオパシー

- ・ ホメオパシーの記事と報道
- ・ WEBRONZA の「生にもホメオパシー」
- ・ 黒岩祐治氏による週刊ポスト（2010年）の記事

ホメオパシー批判は統合医療つぶし？

週刊ポスト（2010年12月3日号）に、黒岩祐治氏による『「ホメオパシー叩き」に隠された「統合医療は迷信」の権威主義』（短期集中連載「検証 医療とマスコミ」の第5回目）という記事が掲載された。（この連載記事の副題は『メディアがバラ撒く「虚報」という名の病原菌』である）
以下のエントリも参照。

- ・ 「「ホメオパシー叩き」は統合医療潰しを目的としていたのか？」 NATROM の日記、2010-11-18

黒岩氏の記事で、まず違和感を感じるのは、

新しい勢力の芽をつみとろうとする旧勢力の力が働くのはどの業界にもあることだ。医療も例外ではない。わずかな事故例をマスコミが曲解して大々的に取り上げることで、新たな医療の可能性が否定されるとすれば、すべての国民にとって不幸なことである。

という最初の文章である。ホメオパシーって「新しい勢力」や「新たな医療」なの？ 200年の歴史があるのに？ 黒岩氏のいう統合医療には漢方やアーユルヴェーダも含まれているが、これらの歴史も相当古い。どこが「新しい勢力」なのだろう？

ホメオパシー批判は「新しい芽をつみとろうとする旧勢力の陰謀」などではなく、昔からよくある科学と迷信の対立なのである。

黒岩氏は『私は決してホメオパシー擁護論者ではない』としながらも、『ホメオパシーが原因で死亡するなどということもまた、ありえない』や『ホメオパシーそのものが害だったのではない。ことさらホメオパシーそのものを叩くというのは少し論点がズレている』など、ホメオパシー擁護ともとれる主張を行っている。

また、以下のようにも述べている。

ホメオパシーの非科学性を論じている記事の流れでは、ホメオパシーの一事を統合医療全体の万事に広げようという意図を感じてしまう。記者がそういう作為を持ってこの記事を書いたものなのかがどうかは知らないが……。

記者の意図はわからないが、統合医療潰しを「感じてしまう」ということのようなのだ。さらに記事の最後のほうにも『これを契機に統合医療全体を潰してしまおうという企みにも感じられる』とまた「感じたこと」を述べている。ジャーナリズムとは事実を伝えることだと思っていたのだが、「感じたこと」を述べるだけでもいいのだろうか？

この記事について読者からの意見が、「黒岩祐治 明日を語らふ」の「交流の場」に掲載されている。

- ・ 「ホメオパシーの記事で気になりました。」 "たま"さんから 2010.11.23

・「週刊ポスト (2010年12月3日号)を読みました。」 "リボン"さんから 2010.11.18

黒岩氏の反論

こうしたネット上での批判を受けて、「検証 医療とマスコミ」の第6回目も予定を変更して『「ホメオパシー問題」に私がこだわった理由』(週刊ポスト 2010年12月10日号)となった。この記事を受けての、NATROM氏のブログエントリは次のようなものである。

・「ホメオパシーが叩かれる理由」 NATROMの日記、2010-12-03

今回の記事で黒岩氏は、ホメオパシーについて以下のように述べている。

「毒をもって毒を制す」といいながら、元の成分が残らないほどに薄めた水で作った飴玉に効果があるわけがない。日本ホメオパシー医学協会は薄めれば薄めるほど効果が出るなどとしているが、それがいかに非科学的かは、あえて科学的証明をする必要のないほど自明なことではないのか。日本学術会議の主張は私の考えと同じである。

それでも「ホメオパシー叩き」は「西洋医学の権威主義」的な考え方の現れであるという立場は崩していない。

「統合医療全体のイメージダウン」を危惧する黒岩氏は、過去の事例として「小柴胡湯」と「アガリクス」を挙げている。

1996年3月に医療用漢方薬「小柴胡湯」の副作用で、2年間に88人が間質性肺炎を起こし、10人が死亡したことが報道された。その結果、「小柴胡湯」の売り上げが12分の1に激減しただけに留まらず、医療用漢方薬市場自体が6割弱に落ち込んだ、とのこと。(92～03年)

2004年4月には、アガリクスを引用していた男性(60歳代)が肝炎を発症し死亡していたことが判明し、製品の自主回収が行われた。しかし、厚生労働省が動物実験を行った3社の製品のうち問題があったのは1社のみであった。それにもかかわらず、2005年当時1兆円を超えるといわれた健康食品市場は一気に冷え込んだ、とのこと。

黒岩氏は、このような『「一事が万事」の報道で、結果的に大事なものまで巻き添えにしてしまった事例』が過去にあるので、今回の「ホメオパシー死亡事故報道」についても過敏に反応してしまった、としている。

しかし、統合医療のイメージや市場の心配をするよりも、その安全性と有効性の確立を優先すべきではないのか? 「正しい統合医療実現論者」を自称するのであれば、「根拠に基づく医療」(EBM)の重要性を認識すべきだろう。まだ安全性・有効性が確定していない段階で、その「可能性」ばかりを強調すべきではない。

代替医療で問題なのは、有効性や安全性を確認する厳密な試験を受けないまま、その商品が市場に出回ってしまう、ということである。「推定有罪」にならないようにするためにも、「統合医療」を推進する側がホメオパシーのようなインチキを排除し、その信頼度を上げていく必要がある。

黒岩氏はサイモン・シンの著書「代替医療のトリック」(新潮社、2010/01)について、以下のようにも述べている。

日本人の生活の中に溶け込んでいる鍼灸ですら、プラセボ効果以外の効果なしとして否定されている。これに疑問を感じる専門家は少なくないはずだ。

EBM の考えに基づけば、生活に溶け込んでいる伝統医療だからと言って、特別扱いしてもいいということにはならないはずだ。効果の確認が公平になされなければ、標準医療とは呼べないだろう。サイモン・シンの主張に疑問を感じた専門家は、実験データを集め、証拠に基づいて反論すればいいのである。

実際に、伝統的な漢方であっても、有効性をきちんと示せば、標準医療として認められることもあるという例が、NATROM 氏のブログで紹介されている。

- ・「「癌霊」1号が白血病に効く！代替医療が標準医療になるとき」 NATROM の日記, 2010-09-28

2 回目の記事についての読者からの意見も、「黒岩祐治 明日を語らふ」の「交流の場」に掲載された。

- ・「「週刊ポストの記事読ませていただきました。」 "リボン"さんから (2010.12.01) と "たま"さんから 2010.12.08

JPHMA は黒岩氏の記事に大激怒 !!

- ・「「週刊ポストの記事第 6 回 本連載が大論争を巻き起こした(「ホメオパシー問題」に私がこだわった理由) に対する見解」 ホメオパシー新聞 12、JPHMA

一部を引用しておく。

黒岩祐治氏は「由井氏は日本にホメオパシーを導入した張本人であり」と書いていますが、「張本人」という言葉を辞書で引くと、「事件の起こるもとをつくった人、首謀者、騒動の中心人物(大辞泉より)」「主謀者、首犯、首領、首魁(しゅがい)、巨魁、元凶」(必携類語実用辞典より)と出てくることからわかるように、由井氏に対してあたかも問題を起した首謀者扱いの言葉であり、事実無根の誹謗中傷であり、名誉棄損となるものです。由井氏を知らない人はこの記事を読むことで、由井氏を誤解し、悪い印象をもってしまうことが懸念されます。時にホメオパシーというよくない療法を日本に持ち込んだふとどきものということ、ホメオパシー療法も否定する発言です。

日本統合医療学会とホメオパシー

黒岩氏が「いかに非科学的かは、あえて科学的証明をする必要のないほど自明」とするホメオパシーだが、日本統合医療学会は以下のような見解を表明し、日本学術会議とは意見を異にしている。

- ・「日本統合医療学会のホメオパシーに関する見解」(pdf ファイル) 2010/09/23

日本学術会議が発表した、平成 22 年 8 月 24 日付けの「ホメオパシーについての会長談話」内に「ホメオパシーの治療効果は科学的に明確に否定されています。」との記述があるが、ホメオパシーの臨床的有効性については、特にヨーロッパにおいて多くの報告がなされており、動物実験における有効性も報告されている。これらの事実を勘案するに、更なる精査が必要である。

- ・「ホメオパシーに対するの日本統合医療学会理事長の見解」(pdf ファイル) 一般社団法人日本統合医療学会理事長 渥美和彦, 【2010/08/26】

アメリカ国立衛生研究所(NIH)では、ホメオパシーは代替医療の分野として、調査研究の

対象となっており、当学会でも同意見である。

諸外国に於いては、ホメオパシーの有効性の報告が多くあり、ホメオパシーは研究の対象であると考えられている。

黒岩氏はこの意見の相違について、どのように考えているのだろうか？日本統合医療学会がホメオパシーに寛容であり、「呪術もどきのいかがわしいもの」を排除することができないのであれば、「統合医療そのものがいかがわしい」とみなされる危険性があるのではないか？「くそも味噌もいっしょくた」というわけにはいかない。「安全安心の療法を選別」するためには、懐疑的・批判的な意見も真摯に受け止めていくべきである。

以下のリンクも参照。

- ・「ホメオパシー騒動は他人事？ 統合医療学会の能天気「見解」」 やや日刊カルト新聞、2010年8月27日金曜日

黒岩氏と統合医療

黒岩氏には「末期ガンなのにステーキを食べ、苦しまずに逝った父」(講談社、2009)という著書があり、日本ホメオパシー医学会の帯津良一との接点もあることが、こうした主張に繋がったものと思われる。

- ・「西洋医学だけでは届かないところをカバーする“統合医療”」 「NURSE SENKA」2006年4月号、「黒岩祐治 明日を語らふ」

埼玉県川越市の帯津三敬病院は“統合医療”を実践している病院として有名です。帯津良一名誉院長はかつて東大附属病院第二外科で働く外科医でしたが、「西洋医学には届かないところがある」という思いから、統合医療に目を向け始めました。

- ・「黒岩祐治のメディカルレポート」 22回 末期がん患者の場合・5、スカパー！ 医療福祉チャンネル774

[ゲスト] 帯津良一さん (帯津三敬病院名誉院長、日本ホリスティック医学協会会長)

自称「医療ジャーナリスト」について

自称「医療ジャーナリスト」には、現代医療に批判的で代替医療に好意的なあまり、ホメオパシーも擁護してしまうという人物が多いようだ。以下のリンクを参照。

- ・「砂糖玉のように甘い“医療ジャーナリスト”たち」 「やや日刊カルト新聞」 2010年9月14日火曜日